

# 甲南大学 総合研究所報

甲南大学総合研究所 〒658-8501 神戸市東灘区岡本8-9-1 電話 (078) 435-2331(ダイヤルイン)

## 第33回甲南大学総合研究所公開講演会

### 「琉球そして沖縄」

— 歴史そして沖縄 —

講演者 文学博士 高良 倉吉 氏  
(琉球大学法文学国際言語文化学科教授)

辻田忠弘 所長：こんにちは。12月のお忙しいときに皆様お集まりいただきましてありがとうございます。本日進行係を務めさせて頂きます。総合研究所所長の辻田忠弘でございます。総合研究所では年に2回このような公演会を開催しております。今回は沖縄から高良先生をお招きいたしまして、「琉球そして沖縄」という今日的な問題をお話頂こうと思っております。高良先生のご紹介ですが、今更いうまでもなく、皆様、新聞などでよくご存知かと存じますが、沖縄の文化研究の第一人者でございます。沖縄には、首里城があるのをご存知だと思います。この首里城の復元を高良先生を中心に行われたのです。これは大変すごいことで、できて間もないにもかかわらず、もう世界遺産になっています。世界遺産を造った先生でございます。私自身も首里城に何度か訪れたことがあります。首里城には龍が3匹います。実はその龍自身の指は4本で、ここのところはとても大事なところで、北京などの龍は5本指なのです。というのは、琉球自身が中国の属国という意味合いから、5本の指の龍が許されず、4本指の龍になったわけです。普通であれば、お城を復元した場合、5本指の龍を造ることもできるわけです。しかし、これを学問的に正確に復元したいということで、すべて龍の指



は4本なのです。大阪城の復元とはまた全然違って、琉球の歴史に則り、学問に則って正確に復元されたのです。ですから、この首里城は大変価値があり、瞬く間に世界の文化遺産と認められたわけです。高良先生に、今日はその辺のところも含めて琉球と沖縄のお話をさせていただこうと思っております。

高良先生：皆様、こんにちは。琉球大学で琉球史という看板を掲げて学生達と一緒に勉強しております高良でございます。神戸を中心に大きな震災があって、この震災のひどさ、その後の復興の様子などを私はテレビや新聞などのマスメディアを通じてでしか知らなかったのですが、3年前、京都に出張がありましたときに、どうしても神戸の復興の

様子を見たかったものですから、半日ほどタクシーをチャーターして、神戸をぐるぐると拝見させていただきました。タクシーの中での慌しい訪問だったのですが、着実にめまぐるしい速さで復興が進んでいるのだなとつくづく感じました。復興をささえている、様々な企業や、行政、政府のバックアップがあったのでしょうか、神戸に住む人々の知恵ですとかパワーや人とのつながりのなせる業なのであろうと思います。このような姿を見せていただいて、少し安心して沖縄に帰ったという経験がございます。あらためまして、今回、総合研究所に呼んでいただきまして、沖縄のPRをする機会を与えていただきまして、大変感謝しております。

お手元にあるちらしに私のプロフィールが書いてあります。沖縄県という島には、人が住んでいる島が大体50ほどございます。一番大きな島は、沖縄本島、那覇市という県庁所在地のある島ですが、私は、その50の中にあるとっても小さな島で、伊是名島というところがあります。私はそこで生まれました。小学校の1年生までそこに住んでいまして、その後、小学校2年生から、中学を卒業するまでの8年間は、南大東島で過ごしました。南大東島は、那覇市から大体太平洋の東の方に約400kmほど離れたところにありまして、大変変わった島でございます。実は、1900年まで人が住んでいなかった、無人の島でした。去年がちょうど100周年だったのですが、今から、約100年前に、その島に、東京、伊豆諸島の八丈島の人々が初めてその島に入って歴史を作り始めたのです。沖縄県の中にありながら、伊豆諸島の人々が歴史を始めたという少し変わった島であります。南大東島という島は、夏場の台風情報などでは、おなじみの名前かと思いますが、台風が沖縄や日本列島に近づくときには、大体はその島の近くを通ります。日本の台風観測の最前線にあたるような島でして、私の父親が気象界の人間だったものですから、その島へ移住しまして、8年間暮らしました。今日の話には直接関係はないかもしれませんが、私は生粋の沖縄の人間ですが、小さな離島で生まれ、南大東

島のような変わった島で過ごしたために、気分的に沖縄のことを考える時に、そもそもの初めから自分が沖縄の人間であるとは思っていないのです。沖縄とは、私にとっては大変珍しいものであったのです。南大東島で中学を終え、高校で那覇に行ったのですが、そのときみた、沖縄の伝統行事が大変珍しかった、或いはアメリカ軍の基地が珍しかったのです。要するに、八丈島の人達が開拓をした島であったために、沖縄的な伝統がなかったわけです。年中行事もありません。もちろん、アメリカ軍の基地もありません。ですから、私は南大東島という変わった島から、沖縄の代表的な町である那覇の高校にやってきました、まるで留学生であるかのような錯覚を覚えたことを今でも鮮明に覚えています。したがって、今日お話する、沖縄の歴史、琉球の歴史についても、私が南大東島で育ったということが大いに関係しているのではないかと思います。つまり、伝統的なものにどっぷり浸からないで暮らしていたために、沖縄の伝統がまるで異国の風景、変わったものだ、なじみの薄いものとして映ったために、一体なんだろうかと興味を覚え、沖縄の伝統という文化を勉強して身につけていくきっかけになったのだと思います。

さて、沖縄というところは、先ほど辻田先生がNHK朝の連続TV小説「ちゅらさん」のお話をされていましたが、沖縄のメンタリティーや、平良とみさん演じる沖縄のおばあのようなキャラクターが随分うけたりしていますが、客観的にみて沖縄とはどういうところに特徴がある県、地域なのだろうかということについて少し簡単に説明したいと思います。私にとって、先輩方の研究成果などを勉強してとらえた沖縄の特徴というものを、客観的に整理してみようということです。

沖縄の特徴は大きくわけて三つあると思います。言い換えると三つの切り口から大雑把ですが、沖縄の特徴をとらえることができると思います。

まずは地理と自然です。ご案内のように沖縄県は日本の南の端にあります。沖縄に住んでいる人間は、沖縄を中心に地図を考

えますから、沖縄に座って、地図を眺めますと、北の方に鹿児島県の奄美大島を中心とした奄美諸島があり、その北にトカラ列島という島々があり、その更に北には、種子島、屋久島があって、九州の本土につながるという、そういう島々のつながりの一番南の方に位置します。沖縄県の西には、東シナ海という海があり、そこを西の方へ行きますと、中国大陸があります。南の方へ行くと、台湾があります。沖縄県の西の端に、与那国島という島がありますが、そこから台湾まで100kmしかありません。私も1度経験しましたが、与那国島に行きましたときに、台湾の4000m級の山が見えます。天気がよければ、台湾が見えるという、国境の島が与那国です。沖縄はこういう広がりの中にあり、東アジアという世界の中で独特の地理的位置を占めています。もし、興味があれば、ご自宅で地図を広げてみていただきたいのですが、沖縄県の一番北端は、硫黄島と言います。東の端は、私が育った南大東島の隣にあたりますが、北大東島という島があります。これも八丈島の人が開拓した島です。そこが東の端にあたります。南の端は波照間島で、西の端が台湾から100kmしか離れていない与那国島です。この4つの島を直線で結ぶと、東西の距離が1000kmになり、南北が400kmになります。このように広い範囲の中に、50ほどの人が住んでいる島が点在しています。この1000km×400km四方が沖縄県の県域であります。言うまでもありませんが、日本の北は北海道、南は沖縄までで唯一、雪の降らない、亜熱帯の県が沖縄であります。この1000km×400km四方が亜熱帯気候の中にすっぽりと包まれている、降雪のない唯一の県であります。この中に散らばっている島々が東シナ海にあり、独特な地理に位置しています。沖縄に住んでいる人々は、あまり実感していませんが、そのような小さな島が散らばっているの、私などは、親戚が結婚するとなると沖縄県内を飛行機で移動します。沖縄の人々の交通手段は飛行機です。これと似た状況は北海道がそうかと思いますが、沖縄県は、アメリカ軍が使っている飛行場を含めて大体

17前後ほどの飛行場があります。生活の足として飛行機を使わなくてはならないほどに、島と島の間に距離があります。こういう特徴が今でも沖縄県民の生活の土台になっています。当然のことですが、こんなに広い範囲に沖縄は散らばっていますから、一口に沖縄、古くは琉球と言いましたが、沖縄に住んでいて島々を訪ね歩くとわかることですが、非常に奥行きがあります。たとえば、那覇に住んでいる人間が伝統的に使ってきた那覇方言があります。沖縄の島々の共通語に近い形の方言があります。その方言と台湾から100kmしか離れていない、与那国島の方言は日常生活で話すと通じません。それくらい沖縄はバリエーションに富んでいます。また、那覇のある本島では、3月ごろに中国の影響を受けた清明祭、祖先のお墓の掃除をしたり、お墓に詣でるといふ儀式をする年中行事があります。それは、沖縄本島あたりでは盛んですが、宮古島や石垣島に行きますと、そういうものは元々全然ありませんでした。年中行事をそれぞれの島で比較してみますと随分違います。一言で沖縄、琉球などと呼んでいますが、実は内部は島々が散らばっているために、それぞれ年中行事が違い、バリエーションに富んでいることが確かめられるわけです。

広い範囲に島々が散らばっていて、やがて首里城に君臨する王が島々を支配する琉球、琉球王国ができます。首里城に君臨した王が支配した範囲です。政治的行政的な支配が行われました。このように広い範囲の島々をどうやって、支配するのか。まず、それは島と島とを結ぶ海上交通をちゃんと確立させることでした。そうしなければ各島々の支配は無理なことです。沖縄の歴史を調べてみますと、船の問題、船を使って人々が移動する、役人が乗っていたり、税金を運ぶ船が行ったり来たりすることを含めて船は大変重要な意味を持っています。つまり、船なしに琉球、沖縄の政治的行政的なネットワークは有り得なかったということがよくわかりました。沖縄の問題として自然的、地理的な要素がひとつあります。

二つ目は歴史や文化の問題があります。本日はそのことを重点的に取り上げたいと思います。沖縄の島々の最初のころはどういう文化を持っていたのだろうかということに多くの人間は関心を持ちます。たとえば、言葉、方言の問題で、言語学という学問があります。沖縄の生活の中に定着している伝統的な習慣やしきたりといったもの、年中行事などを調査する民俗学や人類学の研究者たち。沖縄の古い墓から出てくる骨を調べて骨を分析することによっていくつかの重要なデータが得られるという形質人類学や解剖学、或いは昔の生活の跡を調べる考古学や、私たちのような歴史の研究者などいろいろな学問が関わって、沖縄について調べておりますが、結論はこうです。日本の古い文化と共通していることです。その一つの証拠は、沖縄の島々の遺跡から縄文土器が出てきました。それは土器のかけらが出てくるだけではなく、縄文文化と呼び得るような文化の痕跡だとかが確認されています。言葉の面からみても、沖縄の島々で話される方言。たとえば、普通に話をするともまったく通じませんが、言語の観点から文法だとか、音韻をみると、それは確実に沖縄の方言は日本語の仲間であるということがわかっています。出発点は、歴史の古いベースは本土と共通したものを持っているということが明らかになっています。

ところが、やがて沖縄の島々は、少しずつ日本列島と異なる歴史的歩みをしたのです。首里城に王がいて、島々を支配し、中国と交流するという独自の政治体制ができあがります。これが、琉球王国です。それは、日本の本土の国家とまったく違う。室町時代の日本と交流を行い、また桃山時代の豊臣秀吉と交流し、徳川時代の日本とも交流しました。しかし、基本的には独自の国家として存在し続けているのです。日本本土とは、政治的行政的には区別されるような国家というものが、500年という長期にわたって存在していたということが歴史文化の二つ目の特徴です。その中に独自ではぐくまれた文化に加えて、様々な地域と交流し情報を得ましたから、文化の融合が生まれて琉球文化だとか沖縄文化

だとか言われる文化が生まれました。独自性というユニークな側面を歴史的に付け加えていくような文化の営みが行われたことが二つ目の特徴です。

三つ目は、沖縄問題に絡みますが、徳川体制が明治維新によって倒れました。やがて日本は近代国家としてスタートするわけですが、日本列島は島ですから、東西南北の国境線をしっかりと確認することが大切でした。たとえば、北はロシアと千島樺太交換条約のようなものを結ぶ。アメリカと交渉して小笠原諸島を日本の領土に入れる。西の方は未だ韓国ともめている竹島問題があったりしますが、領土の問題。南側は実は琉球の問題でありました。そのころは、当然、琉球王国の存在がありました。明治政府は南の国境線をどのように確定するか、日本の縄張りをどこまでするかということが当然外交的課題になります。その頃はイギリスをはじめとして、欧米列強、ウェスタンインパクトというものが、アジアにどんどん加わっており、次々とアジアの植民地化が始まっています。その中で近代日本の南の国境をどうするか。日本で次々と明治から改革が行われますが、明治12年、1879年の春に、明治政府は、軍隊と警察を動員して、嫌がっている琉球の王とその家来たちを圧力をかけて首里城から追い出したのです。そのことによって、琉球王国体制が崩壊し、沖縄県がおかれしました。わが国で最後に置かれた県が沖縄県なのであります。このような形で日本のメンバーの中に組み込まれて行くという歴史を辿っていったのです。

1945年(昭和20年)太平洋戦争の最後の戦闘、アメリカ軍と日本軍のもっとも激しい地上戦が沖縄の島々で展開されました。沖縄の住民が生活している場所が戦場となり住民が巻き込まれました。当時の沖縄県民の4人に1人の割合で命を落とすという激しい戦でありました。この戦争の結果、沖縄の島々は日本の施政権から切り離されて、アメリカが単独で支配するという状態になり、アメリカはどんどん基地を建設するようになりました。冷戦時代のアメリカの世界戦略の拠点に沖縄を作り変えてしまうというこの構造が今日ま

で沖縄基地問題として継続しているわけです。しかし、米軍統治時代に沖縄住民たちは、アメリカの軍事的支配を受け入れ、現状維持でいくのか、一部の意見では、我々は独立しようと主張された時期もありました。圧倒的な大部分の人達はそうではなくて、やはり我々は、日本人であるから日本に帰ろうと考え、日本復帰運動が米軍統治の中で盛んになり、日本の多くの国民もそれを支持しました。1972年（昭和47年）5月15日に沖縄県が復活しました。明治12年に沖縄県が設立されて70年後、戦争のため、27年間、沖縄県は消えてなくなっていたのです。そして、また、沖縄県が復活したのです。なぜこのような歴史の話をしたかといいますと、沖縄の歴史を語るときに、沖縄以外の他の46都道府県とかなり違います。今、説明いたしましたのですが、沖縄はいつから日本だと考えたらよいのか？と問いかけたとき、「縄文文化でもあったし、言葉も日本語の仲間なのだから、ずっと沖縄は日本だと考えてもよいではないか」という意見もあるでしょうが、後に琉球王国という独自の国家体制があったということをどう説明するのかという疑問がわいてきます。「1879年（明治12年）に沖縄県がおかれた時からでいいではないか？」とする議論も安定しません。なぜなら、1945年から27年間も日本から切り離されて沖縄県はなくなるのですから。「1972年の沖縄県がふたたび復活してからが日本である」という意見は、それはわかりやすいけども、それ以前の沖縄県はではどう説明するのか？それ以前の文化や歴史、むしろ日本と一体的であった沖縄県をどう説明するのか。と、結構難しい方程式なのです。そういうような問題が沖縄の歴史の中にはまわりついています。歴史のプロセスが複雑な経過を辿って、現在の沖縄という地域があるのであります。

三つ目は、あえて言うと現代的な問題です。これの象徴的な問題は基地問題であります。わが国の国土に置かれている、在日米軍基地の75%が沖縄県に集中しています。なぜ集中しているのか、それは、戦争が終わった後、27年間の米軍統治時代に

作られた歴史的所産なのです。この歴史的所産はもう終わってしまったことではなくて、今も尚、アメリカの軍事的拠点として重要であります。あまり詳しくはお話できませんが、このようなエピソードがありますので、紹介したいと思います。

戦争が終わった後に、沖縄だけでなく、日本の東京大空襲、神戸も空襲を受け、長崎・広島に至っては原子爆弾によって、多くの犠牲者をだす、戦争被害を受けました。日本の多くがまさに戦争の犠牲を出しました。そのことは私も承知しています。戦争が終って、旧ソ連とアメリカをそれぞれリーダーとする冷戦が激しくなって参ります。その時に、アメリカは敗戦国日本に対して、こういう政策をとりました。日本をできるだけ強力な再軍備をさせずに、すみやかに経済復興させ、西側陣営のメンバーとして日本を経済的に発展させ、国民の豊かさを保障するような状況を日本にもたらそうとしてくれました。西側諸国としてのパートナー、メンバーとしての日本を位置付けようとする政策をとりました。

やがて1960年代、高度経済成長期時代にその政策はどんどん加速されていきますが、ある条件がひとつありました。日本の中のある部分を切りとって、アメリカが使いたい放題に使える状況にしてしまう。そこは経済的な発展を保障するというよりも、アメリカの軍事基地、要塞を築くということだったのです。そこが沖縄だったのです。

たとえば、ある専門家の書いた論文によりますと、1950年代、朝鮮戦争勃発以降、沖縄米軍基地の基地建設が凄まじい勢いで始まりました。広大な米軍基地が建設され、次々と、建設需要が発生しました。大型の建設事業は一体どこが仕事したと思われませんか？後の日本本土で大手ゼネコンといわれた会社が沖縄でこの建設を行ったのです。

その頃、日本はまだ外貨であるドルを稼ぐ機会は少なく、沖縄の基地建設に参入することによりドルを稼いだのです。ある経済学者の試算によりますと、1950年代に日本が必要とした外貨の2割か3割ぐら

いを沖縄の基地建設でドルを稼いだと言われています。

やがて、沖縄はアメリカのドル通貨を使う経済となりました。これも様々な経済学者が指摘していますが、アメリカ側の情報公開されたマル秘文書によると、驚くべきことに、沖縄の人にドルを使わせたのは、意識的にそうさせたということらしいのです。つまり、世界通貨であるドルを沖縄の人が手に入れると、それを使って世界から買い物ができるのです。今、沖縄で最も人気のあるポークランチョンミートという缶詰があります。缶詰をオランダやアメリカ、オーストラリアからドルで買っていました。次々と外からドルで買い物ができます。沖縄の産業は外からドルでものを買って仕入れて、それを地域に供給するという小さな商業が発達していきました。そのドルを沖縄の人はどこで稼ぐのかと言いますと、基地で働くか、基地で働く兵隊が消費をする、基地経済というものに依存しなければ、ドルが稼げないような構造にしてしまうのです。後にマル秘文書が公開されて、それを分析した経済学者たちの研究論文を読むと偶然そうなったのではなく、沖縄の経済が基地に依存しなければならないという構造を作り上げているという分析結果が明らかになっています。そのような経済の政策ですが、結局は、ものを仕入れて売るといったサービスの第三次産業が非常に肥大化した産業構造ができました。これが72年沖縄が日本に復帰した以降もそのまま残っています。ある意味で、第一次産業、第二次産業の部門が非常にウエイトが小さく、第三次産業の部分が肥大化した経済構造のまま1972年沖縄は日本に復帰したのです。今でもその経済構造は変わっていません。

沖縄にとって、基地問題、米軍統治時代の問題というのは、過去の話だけではないのです。現在の沖縄県の経済構造を規定する状況になっているという意味でも、またこれを含めての現代の問題が沖縄にはあります。米軍基地の問題、安全保障をどう考えるか、日本とアメリカの関係をどう考えるか、政治的な立場だとか、安全保障観はそれぞれ違うでしょうが、どういう立場

をとるにしろ、このような問題が、現代の問題として沖縄をめぐって存在するということは当然あるわけです。このような状況のなかで、私のような人間は沖縄の過去、歴史と向き合って勉強し、そこで学んだこと、わかったことを整理して、多くの人たちに伝えるということが商売になっているわけです。このような特徴をもつ沖縄というもの、自然地理的な条件、歴史文化側からの状況、現代的な特徴というものを頭におきながら、歴史や文化の問題をいくつかわかりやすい例をあげて、沖縄のバックグラウンドを説明したいと思います。

手元に1枚の地図NO. 1を用意しましたので、ご覧ください。東アジア（日本、朝鮮半島、中国、台湾）東シナ海という海を囲むように横たわる国際的な諸地域を東アジア世界といいます。南シナ海という大きな海がありますが、これらの一帯を東南アジアとっています。お手元の地図は、下にクレジットがついていますが、14世紀末から16世紀後期、お馴染みの日本の歴史でいえば、室町幕府ができた頃から織田信長が天下人を目指して躍進中の時代にあたります。この時代に限定して、当時琉球と呼ばれた、琉球王国という存在であった沖縄がアジアの諸地域とどう交流をもっていたのか少し説明してあります。この当時の日本の代表的な国際貿易港博多を中心に、いろいろな地域に琉球船が行き来する。朝鮮半島のプサンに、しきりに出入りをする。東シナ海を越えた向こう福州を拠点にしなが、首都北京に行ったり来たりするような状況がありました。私はこの福州にこの10月に調査に行きましたが、今でもこの福州の町の郊外には、沖縄の人たちが眠っているお墓があり、文化財に指定されています。そして、更に南シナ海を囲むようにして存在する国際社会、たとえばフィリピン、この当時は、ルソンに出かけ、現在のベトナム、アンナンに出かける。現在のタイ、当時のシャムに出かけその首都であるアユタヤにも行っています。マレー半島中央部、パタニにも出向き、シンガポールの近くにあるマラッカ、スマトラ島のパレンバンですとか、ジャワ島のカラバ（今のジャカルタ）、

ジャワ島の東にスラバヤという大きな町がありますが、そこから車で1時間ほど行ったところにグレシクという、スパイス貿易の拠点であった貿易港がこの当時存在しました。そのようなところに、このちっけな島々でできた琉球の船がしきりに出かけていたわけです。

この地図は、ここで完結しているわけではありません。マラッカというところに注目していただきたいのですが、当時、琉球の船は、マラッカに毎年のように出かけています。マラッカは東南アジアの貿易拠点でありました。東南アジアで最大の貿易港といわれていましたから、琉球の船が毎年マラッカへ行ったということは、西のインド洋からインド商人が来ているのです。そうすると、当然、琉球の人々はインド商人と取引をマラッカで行います。インド商人がつないでいる西の方に伸びている貿易ネットワークがマラッカに連結しつなっているのです。16世紀にマラッカにやってきた、ポルトガル人のトメピレスのレポートによりますと、琉球人はここで、ベンガル産の綿織物を喜んで買っているとレポートしています。当然のことですが、インド洋世界はイスタンブールが代表する西アジア世界にも伸びておりまして、またイスタンブールを拠点として地中海にまで伸び、東西貿易ネットワークにつながっています。それが、東のマラッカまでのびており、マラッカまでのびた東西貿易ルートに琉球の交易ルートがジョイントしつなっているという状況にあります。そのようなスケールでみていただきたいと思えます。

私は、沖縄を勉強し、その歴史の特徴を自分なりに探り、整理して多くの人に伝えたいと常々思っています。沖縄の島々にはこのようなバックグラウンドがあるのだということを伝えたくて、この歴史の広がりをとにかく確かめてみよう、その地図にのっているところにはほとんどすべて行って見ました。デスクワークで東南アジアの文献ですとか少し勉強して大体のイメージは捉えられるのですが、たとえば、この東南アジアのアユタヤというところを例に挙げてみましょう。

アユタヤは、シャム王国の首都でありました。私は1974年に初めてアユタヤに行って、驚いたことがあります。琉球の船が那覇の港を出て、東シナ海を南下し、南シナ海という広大な海に入り、そしてシャム湾からアユタヤへ行きます。この航海にだいたい片道約2ヶ月かかっています。この時代にはまだバンコクはできていません。戦前の日本ではメナム川と言われた、東南アジアを代表するチャオプラヤ川があります。メナムというのは、タイ語で川という意味です。アユタヤの現地に行って初めて実感したのですが、アユタヤというシャム王国の首都は、海からこのチャオプラヤ川を北へ100kmさかのぼったところにあるのです。私は船をチャーターして何度もこの川を行ったり来たりしましたが、実に流れが速いのです。この川をはじめてみたときに、当時の琉球の貿易船の航海能力、帆走能力に驚嘆しました。あの流れの速い川に逆らって、航海することは容易なことではなかったでしょう。そして、100km進んでアユタヤに碇を下ろすのです。そこで初めて私は、琉球貿易船の能力、航海技術について勉強しなくてはならないと、問題提起をこのアユタヤで感じたのでした。このようにして、地図にかかれている現場へ行き、チャンスをつかまえては学んできました。また、スマトラ島のパレンバンでは、ジャワ海に注ぐムシ川という大きな川を30kmさかのぼったところに、パレンバンの貿易港がありました。ここも流れが速いのです。ボートをチャーターしてこの川を走りますと、浮草がものすごい勢いで流れていくのです。まさに激流のような川を逆に30kmも進むことができるというのは、かなりの能力を持っていたと思います。このように、随分それぞれの現場で教えられました。

さて、問題は、このようなかつて交流の時代があった沖縄ですが、なぜ小さな島々の集まりでしかない沖縄が、このように壮大なアジアにまたがる交易ルートを開き、維持運営することができたのかということです。今日はこみいった話は抜きにして、ポイントだけ説明したいと思えますが、こ

の地図の世界を成立させる条件がいくつかあります。

まず、この地図の前提になっている、琉球のはばたき、ある意味壮大な活動を可能にさせた条件がいくつかありますが、そのひとつは中国の動きです。中国の政策といってもよいでしょう。チンギスハンの勢力が中国に入り、元という国をつくりました。NHKの大河ドラマで、北条時宗をやっていましたが、モンゴル人が中国を支配します。モンゴルはやがて廃れていき、元の末期のころには大反乱が各地で起こりました。やがてそれを平らげて中国全体の権力者にのしあがった、スーパースターがいます。中国人が愛する歴史上の人物のひとつですが、朱元璋です。彼が敵対する勢力を押さえ明という国を建て、そして初代皇帝、洪武帝になりました。新しく建った明の対外政策が琉球に大きな影響を与えたのです。ひとつは、中国の皇帝を頂点とする権力、それは、中国の国内だけにとどまらない、中国周辺のアジアに対しても、中国は盟主であるNO.1であるという政策をとります。そのために、ベトナムの王やシャム(タイ)の王の地位を中国の皇帝が認める、これを冊封といいます。アジアの王を中国の皇帝が認知することをいいます。それにたいして、ベトナムやシャムの王は、中国の皇帝に忠誠を誓うために貢物をもって挨拶に行くのです。このことを朝貢といいます。冊封と朝貢という、決して対等な関係ではない、中国の皇帝が上でアジアの王は下であるという従属的外交によって中国との関係が成り立つ政策を展開していました。なぜかと言いますと、この関係を結ばなければ、中国との貿易が認められなかったからです。中国と貿易をしたい場合は、そのやや隷属的な平等ではない外交関係を強いられて中国との貿易を成立させていました。

ところが、問題は、明の政府が貿易を禁止する海禁という政策を展開したことにあります。いろいろな理由がありますが、要するに鎖国です。中国人が外に出ることを禁止し、すでに海外に住んでいる中国人たちが自由に国に帰ることさえも禁止されました。中国と海外貿易をしていた国々

は大変なダメージを受けました。その結果、中国政府の認知する制度の中でアジアの人が欲しがっている中国商品が手に入れにくくなってしまいます。

もうひとつは、貢期という政策をとりました。アンナン(ベトナム)は3年に1度は中国との貿易を許す、マラッカも3年に1度許し、日本は10年に1度許すという政策です。つまり、アジアの国々は毎年中国に行けないのです。中国人が来てくれるのかというと、中国人も海禁政策でアジア各地に渡ることはできない、というような状況になりました。そんな中で、アジアの諸地域の中でもっとも優遇された存在が、琉球なのでした。

琉球は、頻りに中国に行く権利を認められていました。そうしますと、琉球の那覇に莫大な量の中国商品が持ちこまれたのです。しかし、使いきれぬものではありません。アジアの人々は皆中国商品を欲しがっています。話は簡単です。琉球は、中国人に代わって中国の商品をアジアへ売りに行けばよいのです。中国商品を仕入れて、売りさばきに行ったのでした。琉球にはこの当時、あまり輸出商品がありませんでした。せいぜいあったのは、馬です。馬を随分輸出していました。その他で一番有名なのは、さんご礁の水深10M20Mのところに住んでいる夜光貝という巻貝を輸出していました。夜光貝の中身を輸出していたわけではありません。夜光貝は、表面は石灰で覆われていますが、石灰分を取り除くと真珠層という虹色に光る肌ができます。この真珠層を輸出するのです。螺鈿という漆器の原料になりました。しかし、その程度でありますので、大量の中国製品を買付けることができません。そこで、マラッカに中国商品を運んで行って、マラッカにやってくる商人たちに売り、今度は、マラッカに集まってくるスパイス、象牙、すず、インドの綿製品など、東南アジアの特産品を買いつけ、それを那覇に持ち帰ります。九州の博多に行き、中国製品を売ります。カラになった船に、日本の特産品を買います。最も好んで買ったものは日本刀でした。日本刀を大量に買いこんでアジアに輸出していました。これらの品々を那覇



に集め、先ほど言いました夜光貝や馬などをつけて中国へ持って行きます。つまり、お手元の地図は中国向けの輸出商品を調達するルートでもあります。

もう一つの条件は、これら海外との貿易、交流などの事業を琉球の民間商人が行ったことではないということです。これらは首里城に君臨する王が経営したのです。王がいて彼を頂点とする行政府、これを首里王府と呼んでいます。ここに様々なセクションがあり、スタッフがいます。そこにいる人間達が海外出張をし、民間貿易業務に従事していたのです。王が東南アジアに行くように任命したこの当時の辞令が残っており、貿易に従事していたことが証明できます。他にも20年前にポルトガルのリスボンで発見されたデイエゴ・デ・フレイタスという男が書いたある興味深いレポートがあります。ポルトガル語で書かれたレポートですが、後に専門家たちが整理をし、英語に翻訳され、やがて日本語に訳されました。フレイタスというポルトガル人は、アユタヤで琉球人と接触しました。ここでお互い仲良くなるにつれ、琉球の貿易船のスタッフたちから話を聞き、そのレポートにこう記述されています。「琉球の首里城の王の命令は厳しく、お前たち東南アジアに出張したら必ず帰って来い。一人たりといえども現地に留まるな、永住するな絶対に帰ってくるのだ」と非常に厳しい帰還義務を負わされている、厳しい政策なのだとその琉球人は、フレイタスに説明したという。別の日にフレイタスは、琉球の船に遊びに行き、そこで目撃した船の甲板の片隅に、アユタヤで死んだ琉球人の死体が三体塩漬けにして、保存されているのを見て、琉球人は死んでも国へ帰らねばならんのかと思ったと感想を述べていますが、これは簡単です。彼らは民間人ではなく公務員で、海外出張しているのですから、当然公務が終わると国へ戻らなければならない。そういうシステムで交流や貿易が行われていたという問題です。国营貿易といえますか、官営貿易といえますか、非民間型の事業として行われていたというところが重要なのです。

ここで、首里城について触れたいと思います。首里城という城は琉球、沖縄の島々を統治する政治や行政のトップである王がいる城です。

海外との貿易や交流をする事業の本部でもある。私は学生たちと酒を飲んだ時に、「まあ、例えて言えば首里城というのは、海外貿易株式会社の本社みたいなもので、王はその社長、会長なのだ」という話をよくするのですが、そういうアジアとの交流の司令塔、ヘッドクォーターが実は首里城なんだということでもあります。

二枚目のNo.2の資料を見てください。首里城がいつ頃できたかよく解りませんが、そこに書いたように15世紀から着々と整備が進められます。京都に室町幕府ができた頃には、首里城もほぼ形が整って沖縄の島々に君臨するような状況が、着々と出来上がっていたと考えてください。そしてアジアとの交流の中で様々な使節団を迎える。たとえば中国の皇帝が派遣したミッション、いわゆる使節団を迎える外交の舞台となっていました。

首里城は何度も焼失しており、私は首里城の復元に携わっていたのでいつ頃完成し、どのような変遷をたどったのか詳しく研究する必要があります。

例えば1453年志魯と布里の乱で首里城は全焼し二人とも相打ちとなりました。城は直ちに再建されましたが、1660年旧暦9月27日に火の不始末で全焼しました。1453-1660年まで焼失の記録はありません。その後1709年またも失火で全焼しました。1671年首里城の屋根を、瓦葺にしていますが、驚くなかれ、それ以前は板葺きで亜鉛やすずなどの合金を塗っていました。1709年以降修理のみで保存されていました。しかし、明治政府により明治12年にいわゆる琉球処分という、琉球王朝を廃止し沖縄県を設置することにより王の支配は終わりを告げたのであります。

沖縄県を設置することで首里城の時代は終わり、国防のため鎮台制度が設けられ、九州方面は熊本が管轄し、明治12年熊本鎮台が駐屯し使い勝手のよいように改築して形を変えられていく歴史が始まりました。軍隊が引き上げた後も学校となったり

グラウンドを作るために建物を壊すなど変形されました。

やがて、有名な建築家の伊東忠太や東京から沖縄文化を勉強しに地元沖縄の女子高にきた鎌倉芳太郎の二人が、沖縄県民に訴えて県民だけの財産だけでなく日本の財産である首里城を後々に伝えていくべきと唱えました。

ところが、不幸なことに首里城は高台にあったため、日本軍の第32軍が地下に洞窟を掘り司令部を設置したため、米軍の激しい砲火に遭いそのため首里城は、完全に地上から消滅したのであります。

その後、調査したところ、首里城が何日も激しく燃えたことを証明するものが出てきました。地中から発見された石灰岩は触れただけでボロボロとくずれてしまいました。戦争のあと琉球大学ができ多くの若者たちが学んでいます。そして、沖縄は米軍の統治時代が終わり、琉球大学が国立になりキャンパスが手狭になり移転することになったのです。

琉球大学の移転により、跡地の利用が検討され、首里城の復元の声が出始めたのです。

首里城の復元は琉球大学の移転により、跡地利用が検討されたことに始まります。そのときから私はメンバーになりました。

首里城が輝いていた時代は4,500年も続きましたが、惜しいことに地上から姿を消してしまいました。先ほど辻田先生から首里城復元の中心人物と紹介されましたが、その状況は2002年NHKテレビで放映されるプロジェクトXを見てもらえたらいろいろな人達がかかわっていることがよくわかると思います。

古建築の鈴木氏や東京大学の稲垣氏など日本を代表する人々が結集してくれました。相当苦勞して復元しましたが、何のために復元したのか。やるからにはできるだけ首里城が息をしていた時のままで復元したかった。いわば中古車でなく新車をつくることです。

テーマとして明治12年以前の首里城を復元しようが合言葉になりました。たとえば1768年の古文書「百浦添御殿普請付御絵図並御材木寸法記」に正殿が大改築されたことが記載されていますが、この文書は非

常に価値のある文書で東京で発見されました。沖縄にあれば戦火で消失していたでしょう。その中に正殿の窓枠に久米赤土を塗っていたことが記されています。赤い土を塗ったということですが、内容はまるでわかりません。古老にきいたところ久米島から赤土を運んだことを聞いたことがあるとのことでした。早速久米島に飛んでその古老に聞いてみると、この島から赤土をとったことは間違いのないとのことでした。しかし大きな島でありいろいろな種類の赤土がありどのようにしたのか、わかりません。

時代考証ならばここが限界ですが琉球大学の理学部の土壤研究者などの意見を聞いて使える赤土を絞りこみました。7タイプを採取し顔料として東京へ運び桐の油でとき配合をいろいろ変え調べました。建物は西に向かって建てられていますので、暴露試験を実施し安定したのを最終的に2点に絞り込みました。なぜそこまでやるのか。沖縄はアジアとの交流を通じ本土とは違う500年続いた琉球王朝という文化があります。

誰が見てもわかるような象徴的なイメージを作り、存在感のある歴史があったことをわかるようにしたい。沖縄戦で全島民の4人に1人が死亡する惨事に見舞われたことを踏まえ、生きている者が戦争で失った文化遺産を取り戻す責任があります。

1992年首里城は一般公開されましたが、入場者が今まで多かった城は二条城で年間130万人でしたが、現在首里城は170万人で日本一になっています。入場料は800円で、借金を返済して残りは基金として蓄え他に使います。

アメリカボストン美術館には琉球漆器があります。イギリス大英博物館にも道具があります。もともと多くの宝がありました。軍隊が駐留してからは、家臣団が生活に困り財宝を売ったりして流失し、戦火で焼失したり、米軍に持ち出されたりされ流失した琉球の文化財に関する情報を収集する必要があります。里帰り展を企画したり、ニューヨークでのオークションで買い付けたり、ブラックマーケットで金を積ん

で買うことを検討するなど、できることはしなければなりません。

首里城の復元は終わったのではなく、失われたものを取り戻すことの始まりと考えています。沖縄の歴史学者は書齋の中で資料を読んだり、書いたりしていたのでは、勤まりません。多くの人々と協力して情報を収集する、あるいはベルリンへ出かけていく、またブラックマーケットに関わるなど、首里城にあった遺産を積極的に取り戻すことが大切です。

そのことにより首里城という建物の空間がよみがえっただけではなく、その中にあった先人たちの文化遺産がわれわれのもとに情報として、里帰り展では物としてみる事ができ、オークションで購入すれば手元に帰ってきます。

戦争で被害を受け意気消沈してしまうのではなくて、できることは全部やって取り返し、回復することが必要です。こういうことを含めて沖縄で歴史研究者が存在している理由があると思っています。

このことを神戸の方々に理解してほしいと思います。神戸は大震災で住宅のみならず、多くの公共施設、甲南大学も校舎の

70-80%が被害に遭われたと聞いています。このように市民のライフラインの被害も多く、壊滅的打撃の中から力強く復興されました。

時間をかけながら失われたものを取り戻していくのがこれからのテーマとなります。沖縄は首里城が復元されるまでそういう問題はあまり取り上げられませんでした。今までは基地問題が大きな問題でしたが、文化遺産を取り戻すことも大きな課題ということが次第にわかってくるようになりました。

首里城は来年公開されて10年になりますが、かつて存在した日時計を復元するなど次第に内容も整ってきましたが、まだまだ困難な復元が残っており、引き続き復元プロジェクトを進めています。まさにエンドレスの事業であります。

説明不足の面もあると思いますが、長時間どうもありがとうございました。

《以上は2001年12月15日(土)  
甲南大学142号教室にて開催された講演に基づく》

#### 《講師紹介》

1947年 沖縄県伊是名島生まれ 南大東島育ち 愛知教育大学卒業、文学博士(九州大学)  
沖縄史料編集所専門員、沖縄県立博物館主査、浦添市立図書館館長を経て1994年4月より琉球大学法文学部へ、琉球史専攻。特に琉球王国の内部構造、アジアとの交流史を研究、首里城復元委員、NHK大河ドラマ「琉球の風」を監修、1987年 日本青年会議所よりTOYP(トイップ)大賞受賞。著書に『琉球の時代』筑摩書房 『琉球王国の構造』吉川弘文館 『琉球王国史の課題』ひるぎ社など、他多数ある。

# 平成13年度研究チーム活動中間報告

## 「環境教材の国際ネットワーク化」

NO. 77 研究幹事 谷口文章 (文学部)

□第1回研究会：2001年5月23日 18:00-20:30

1. 研究員の紹介
2. 本研究会の今後について

□第2回研究会：2001年7月18日 18:00-20:30

テーマ：「環境の医療をめぐる」 谷 荘吉 先生 (はやしまクリニック 名誉院長)

本学・広域副専攻「環境の医学」を担当されている谷荘吉先生より、われわれの身体を中心としながら、内部環境と外部環境をめぐる「健康」の概念、「生命」と「環境」の関係、さらには「バイオ・エシックス」及び「環境倫理」の視点からの議論が展開し、「心の環境」を重視した教育のあり方が重要であることが確認された。

□第3回研究会：2001年10月7日～8日 於：広野グランド

テーマ：環境教育フィールド実習・稲刈り

環境教育広野野外施設において、フィールド体験として稲刈りを体験する。当日は広域副専攻・環境学コース 環境教育の実践 履修学生、教育改革プロジェクトの一環として甲南中・高等学校、甲南女子中・高等学校の学生も参加するなど、「協働 (パートナーシップ)」をととした環境教育を体験することができた。

□第4回研究会：2001年10月19日 18:00-20:30

テーマ：「食と環境」 玉利 祐三 先生 (甲南大学 理工学部)

微量栄養素 (必須微量元素) をめぐるわれわれのライフスタイルのあり方について議論された。

□第5回研究会：2001年11月18日 13:00-17:00 於：神戸国際展示場

13:00-15:00 「環境教育フェア子どもたちの明日に美しい沿岸域を残すために」 展示

15:00-17:00 「環境教育オープン・フォーラム：21世紀における環境教育」

パネリスト：グロリア・スナイプリー氏 (カナダ・ヴィクトリア大学 教授)

パトリシア・チェンバース氏 (アメリカ・ステファン・ディカチャー中学校教師)

加藤 三郎 氏 (日本・環境文明研究所 所長)

高橋 由佳 氏 (タイ・UNESCO 環境教育 バイス・スペシャリスト)

藤村 コノエ 氏 (日本・エコ企画 代表)

コーディネーター：谷口 文章 氏 (日本・甲南大学 教授)

第5回世界閉鎖性海域環境保全会議 (EMEC S 2001) のサテライト事業である「環境教育フェア」に参加する形態であったが、国内外における環境教育教材の展示を見学し、その後行なわれたオープン・フォーラムで、国際的な環境教育の動向と今後の課題について活発なパネル・ディスカッションが展開された。

□第6回研究会：2001年12月20日 18:00-20:00

テーマ：「日本の有害大気汚染物質モニタリング調査とPRTTR制度」 今井 佐金吾 先生 (神戸市環境保健研究所)

化学物質による環境リスク削減のためのモニタリング調査結果の報告と化学物質管理の方法としてのPRTTR制度の法制化に関する議論が活発に行なわれた。

□第7回研究会：2001年12月22日 於：広野グランド

テーマ：環境教育フィールド実習・もちつき大会 (収穫祭)・エコクッキング

収穫祭をかねたもちつき大会・エコクッキングが行なわれた。甲南中・高等学校、甲南女子中・高等学校の教育改革プロジェクトによる中・高校生、ひょうごオープン・カレッジOB・OGの参加を含め100名を超える参加があった。フィールドにおいての実践的な環境教育が市民の参加との協働によって展開された。

ライフスタイルにおける「食」環境をめぐる環境教育の位置づけ、さらには日本固有の従来の伝統文化について考える機会となった。

□第8回研究会：2002年2月22日 18:00-20:30

テーマ：「環境教育における教育コンテンツの活用」 渡辺 隆俊 先生（甲南大学 情報教育センター）

オンライン教育の現況をふまえながら、平成11年度に作成された環境教育情報プロジェクト『人間と環境』を使用した講義の展開において学生の利用状況の報告のアンケートが紹介された。そして、今後より一層充実した教育コンテンツのあり方について活発な議論がかわされた。

□第9回研究会：2002年3月13日 18:00-20:30

テーマ：「環境教材の国際ネットワーク化」 渡辺 隆俊 先生（甲南大学 情報教育センター）

今年度の研究成果報告及び次年度に向けての具体的な方針について講演及び討議を行なう予定。

本年度は環境教材について理論及び実践を含めての検討を行ってきた。次年度より具体的な国際ネットワーク化に向けて研究活動を検討し、次年度のスケジュールについて検討する予定である。

### 「日中言語表現習慣に見る文化相違の研究」

NO. 78 研究幹事 胡 金定（国際言語文化センター）

2001年4月に発足した「日中言語表現に見る文化相違の研究」の研究チームは、2年間の計画で研究を進めている。初年度、次のように研究項目を選定した。①自己紹介の仕方「自我介绍的方法」、②謝り方「道歉的方法」、③褒め方「贊美的方法」、④叱り方「批評的方法」、⑤誘い方と断り方「激清方法和拒絶的方法」である。胡金定は上記の日本語に対応する中国語の基本資料を収集した。原田登美はその中国語に対応する日本語の基本資料の収集を行なった。そして、収集した基本資料を基にして、2001年2月13日（場所：15号館国際言語文化センター第3共同研究室において）胡金定と原田登美が研究会を開催した。今回は、主に①自己紹介の仕方「自我介绍的方法」を取り上げて研究した。中国人は初めて会った人に対しても「どこで働いているの？（在哪儿工作？）」、「給料はどれくらい？（工資多少？）」、「結婚しているの？（结婚了没有？）」、「子供は何人？（有几个孩子？）」、「いくつ？（多大\*数了？）」などと聞くのを好むのである。プライバシーを避けないのが普通ではあるが、日本人はできるだけこれらの話題を避けるのである。また、中国人は初めて会った人に示す礼儀の方法として、握手をするが、日本人は特に握手する慣習はない。この研究を通して、収集した基本資料にある日中言語表現習慣の共通性及び相違性をある程度明らかにしていると思う。これから上記②～⑤のテーマをさらに一歩進んで日中言語表現についての研究を進めて、両言語に表されている文化相違点を整理し、それぞれの特徴を浮かび上がらせることにする予定である。

また、上記の項目のスタイルや表現方法について、研究方法やこれからの進め方を決めて、2回目の研究会の日程を3月25日に決めた。

### 「宗教と大英帝国」

NO. 79 研究幹事 井野瀬久美恵（文学部）

近代、とりわけ18世紀末以降、国内における（いわゆる）福音主義、博愛主義の高揚のなか、英国各地にはミッション協会が設立され、国内外で精力的な活動を展開しはじめた。各協会・教団が派遣したミッションナリの男女は、現地ですさまざまな異文化経験を重ねながら、また他の宗派や宗教、ないしは現地の民間の呪術・物神信仰なども競合しながら、帝国各地に宗教的、文化的、社会的なネットワークをはりめぐらし、大英帝国の拡大を支えた。彼らが築いたネットワークは、政治や経済、社会の変化に応じて意味や形を変えながら、脱植民地化の時代にも一定の役割を果たし続けた。そして今、かつての植民地（とりわけアフリカ）では、キリスト教人口の北から南への移動——換言すれば、ヨーロッパの脱宗教化、再布教を通じたアフリカやラテンアメリカの再宗教化——というグローバルなつながりにおける

大きな潮流ともあいまって、イギリス（そしてヨーロッパ）が押しつけたキリスト教にたいする再検討の動きが顕著である。さらには、かつての大英帝国内部（とりわけアイルランド）において、そして世界各地でも、21世紀の国際紛争・調停における宗教の役割は大きな修正と転換を迫られつつある。

こうした問題意識から立ち上げた本研究会は、今年度の目標を、「宗教と大英帝国」にかかわるさまざまな分野から専門家を招聘し、報告を聴きながら問題意識を洗い出すことに定め、その作業を徹底しておこなった。それゆえに、「宗教と大英帝国」という研究のあり方を探る1年でもあった本年度は、学外から有形無形の協力をかなり仰ぐことになった。ご協力に心から感謝している。さらに、研究会では、専門家の報告とならんで、研究動向報告や書評などを積極的にとりこみ、研究分担者各自の研究スタンスを明確にすることに重心を置いた。また、イギリス帝国史研究会との協賛で「宗教で大英帝国を読む」というシンポジウム（2001年12月1日、於・京大会館）を開催したことも本年度の大きな成果であろう。各研究会の報告者、ならびに報告内容は以下の通りである。

### 第1回研究会（2001年5月19日）

メンバー全員、ならびに外部から多数の参加を得て、「宗教と大英帝国」研究チームの本年度の運営について議論した。すでに宿題として各自にお願いしていた、このテーマにかんする史料所在リスト、ならびに研究動向把握のためのリーディング・リストについても意見交換した。

### 第2回研究会（7月21日）

#### ■北川勝彦（関西大学）「帝国とブラック・クリスチャン——世紀転換期を考える」

南アフリカ経済史の専門家である報告者は、研究の視野を「経済活動の奥にあるもの」にも広げ、そこに宗教の問題を絡めつつ、帝国の転換点でもあった19世紀末から20世紀への世紀転換期への再考を促した。報告は南アフリカを中心にしつつも「宗教と大英帝国」という問題設定そのものへの問いかけを含んでおり、非常に興味深いものであった。

#### ■井野瀬久美恵（甲南大学）

##### 「African Christianityの行方——研究動向」

近年、アフリカでは、キリスト教人口の増大を受けて、「ヨーロッパ流のキリスト教」を再考する動きが活発化している。それは、ヨーロッパ化したキリスト教会（いわゆる African Independent Church）の限界が誰の目にもあきらかになったことから、「アフリカを説明できるキリスト教」を構築しようとする動きとして捉えることができよう。この新しい動きは、“African Christianity”、ないしは“Black Christianity”とよばれる。報告では、1990年代、アフリカを含む南半球におけるキリスト教人口急増の大きな要因であったペンテコステ・カリスマ運動にもふれつつ、「宗教と大英帝国」研究の視座を探った。

#### ■並河葉子（神戸外国語大学）

書評：Susan Thorne, *Congregational Missions and the Making of an Imperial Culture in 19<sup>th</sup> Century England*, Stanford, 1999.

「宗教と大英帝国」研究のひとつの焦点となる19世紀を考える基本文献である本書への書評を通じて、研究の視座を探る書評となった。

### 第3回研究会（10月13日）

#### ■栗本英世（大阪大学大学院人間科学研究科）

##### 「保護、分離と紛争——イギリス＝エジプト共同統治領スーダンにおけるイスラームとキリスト教」

スーダンの南北問題は、植民地統治によって創られたものである。20世紀に入るまで経済的な魅力に乏しかった南部スーダンは、北部スーダンの強大なイスラーム教と対照されつつ、キリスト教によってアイデンティティを与えられていた。報告では、報告者が長年取り組んできた南部スーダンを例に、独立前後におけるミッシヨナリの役割、大英帝国にとつてのポジションなどをめぐって詳細な分析が紹介された。

#### ■井野瀬久美恵（甲南大学）

##### 「あるアフリカ部族王の渡英——1枚の絵画をめぐる」

1904年5月、ナイジェリアの都市国家、アベオクタの王がエドワード7世に謁見するために渡英した。この王は、「前王である自分の亡き父は、亡きヴィクトリア女王から聖書を贈られた」という話を、新聞や雑誌のインタビュー、あるいはアフリカ協会主催の講演会でくりかえした。彼の語りは、その40年ほど前に描かれた一枚の絵画を思いおこさせる。

報告では、この2つの話が「聖書」を軸にどう重なるのか、図像的な分析を含めて報告した。

#### 第4回研究会 (11月10日)

##### ■山中弘 (筑波大学) 「民衆宗教と世俗化論」

メソディスト派を中心とする業績で知られる宗教社会学者である報告者は、近現代のイギリス宗教史を記述する視点を問題にしつつ、制度や教育を含む宗教史の再構成という点から大英帝国の存在を論じた。「宗教と大英帝国」という視点にはどのような切り口があるかを模索する本研究チームに対し、報告者が示した「統合と葛藤」、「成長と競合」という軸は示唆に富んだものであった。

##### ■イギリス帝国史研究会との協賛シンポジウム「宗教で大英帝国を読む」の打ち合わせ

日時・場所 2001年12月1日、於・京大会館

問題提起・司会進行 井野瀬久美恵 (甲南大学)

報告者 ゴードン・ムアンギ (四国学院大学)

「キクユ人ミッション女性にみられる自立意識の高揚、1900～1930年代」

北島義信 (四日市大学)

「アフリカ民衆の側からみたキリスト教——アフリカ解放闘争におけるキリスト教の役割」

宮崎章 (大阪大学) 「ミッションとイギリス帝国」

コメンテーター 北川勝彦 (関西大学) ・ 戸田真紀子 (天理大学)

#### 第5回研究会 (12月15日)

##### ■杉本良男 (国立民族学博物館)

「フィールドから見たキリスト教——人類学とミッションのよじれた関係」

ミッションナリはフィールドワーカーでもあった。彼らは、自分たちの異文化経験を詳細に記録し、そこから人類学という学問が立ち上がったことはよく知られている。その人類学の専門家である報告者は、近年問題となっている「フィールドワークをいかに記録するか」という視点を意識しながら、人類学とミッションとのかわりを時間・空間的に論じた。

##### ■宮崎章 (大阪大学文学部)

「ミッションとイギリス帝国——本国および宗教の視点——」

本報告は12月1日のワークショップ報告をさらに進めたものである。近年急速に見直しが進められた大英帝国史だが、キリスト教はじめ、宗教との関連が真っ向から議論されることはほとんどなく、これまでさほど新しい視点も与えられなかった。英国史、ならびに帝国史を専門とする報告者は、ミッションと帝国との関係をふりかえりながら、ミッション研究における本国のファクターの重要性を指摘するとともに、ミッション史が単純に帝国史とはならないことを強調し、大英帝国史研究からある程度、独立、自立したミッション史研究の必要性を説いた。

なお、2002年3月末には、本年度最後の報告を予定しているが、その模様は次回の報告書でご紹介させていただきたい。来年度は、「専門家に学ぶ」に徹した本年度の成果を生かしながら、メンバーの報告を加えていくことにしている。また、イスラム教ミッション研究の成果にも学び、「宗教で大英帝国を読み込む」意味をさらに考えていきたいと思っている。

#### 「環境と文学」

NO. 80 研究幹事 中島俊郎 (文学部)

私たちのチームは、さまざまな環境が文化、文学に及ぼす影響、また環境がいかに文化、文学作品を生成していくか、といった課題に取り組んでいる。

伝統的なイギリス作家たちが繰り返し描いてきた固有のカントリーサイド文学は、実のところヴァージルに端を発するノスタルジア文学の変奏にすぎない、と R. ウィリアムズは指摘した。この自然観は環境と文学を考えるうえで影響力が強いが、アナ・フォード (言文センター) は、故郷を喪失した現代作家とりわけ戦後のイギリス作家たちがパストラル文学を書くことが可能なのか、そしていかに取り組むのか、といった問題をとりあげる。

サウンドスケープを研究対象とする中島俊郎 (文学部) は、音環境がいかにヴィクトリア朝詩人たちの作品群に定着されているか、といった問題を、同時代の「音」を具体的に再構成させながら、検討している。韻律とは異なる「音」

環境に耳を傾けようとする試みでもある。

貨幣という経済環境がアメリカ文化、文学に与えた影響を追究する秋元孝文（文学部）は、通貨をテキストとして読解することでアメリカ史の断面を浮き上がらせようとする。

紙幣以前にはタバコの葉が貨幣として流通していたこと、紙幣制度への移行、現代アートにおける手書き紙幣の製作などの貨幣にまつわる歴史的事象を横断することで、アメリカの経済=文化環境を読み取っていく。

資料の収集、調査を前半に終え、与えられた研究期間の後半は、それぞれの成果を研究発表、論文をつうじて、学内外から広く批判をおおぎ、さらにその知見を深めていきたい。

（文責 中島俊郎）

#### 【平成14年度総合研究所人事異動のお知らせ】

2002年4月1日より、総合研究所所長には、現所長である辻田忠弘・理学部教授の任期満了にともない、安西敏三・法学部教授が就任することになった。また、次年度の総合研究所委員会の各学部選出委員として、文学部では現委員である斧谷彌守一教授に代わり稲田清一教授が、理学部では引き続き、現委員である酒井宏教授が、経済学部では現委員である佐藤治正教授に代わり小林清晃教授が、法学部では現委員である小泉洋一教授に代わり渡辺武文教授が、経営学部では現委員である福島孝夫教授に代わりマノジュ・シュレスト教授が、国際言語文化センターでは現委員である原田登美教授に代わりアンナ・フォード助教授が選出された。

#### 【平成14年度新規研究チーム】

平成14年2月15日に行われた総合研究所委員会会議において、平成14年度の新規発足研究チームとして、以下のチームが採択された。

- |                                   |                |
|-----------------------------------|----------------|
| NO. 81 「グローバリゼーション下の各国社会保障改革比較」   | 研究幹事：水島治郎（法学部） |
| NO. 82 「マックスウェーバーにおける『民族』問題とその周辺」 | 研究幹事：黒田忠史（法学部） |
| NO. 83 「イギリスと日本」                  | 研究幹事：西條隆雄（文学部） |